

中国における主観的幸福度の規定要因

—浙江省杭州市と中余郷住民調査データを手がかりに—

張 雲武

1 研究背景と研究目的

中国では、1978年から2012年までの国内総生産（GDP）は9.8%で成長し、そのうち2001年から2012年までの11年間でさらに10.2%で成長してきている（国家統計局、2013）。

経済の急速な成長は住民の個人所得を大幅に増加させた。1978年時点では、一人当たりの年収はわずか343.4元（約0.67万円に当たる¹⁾）にすぎなかったが、1990年には1,510.2元（約2.95万円に当たる）で、2000年には6,280.0元（約12.26万円に当たる）に増加し、さらに2012年は、24,564.7元（約47.98万円に当たる）に増加した（国家統計局、2013）。また、経済の急速な成長は、いうまでもなく住民の衣食住などの物質的生活水準を高めた。1978年時点で、都市住民と農民のエンゲル係数は、それぞれ57.5%と67.7%であったが、1990年には54.2%と58.8%に下降し、2000年に39.4%と49.1%に、2012年には36.2%と39.3%にまで下がった（国家統計局、2013）。

一方、経済成長とともに、多くの社会的問題が噴出した。特に貧富の格差の拡大、集団的衝突の多発、社会的信頼度の低下という3つが深刻な問題として指摘できる。まず貧富の格差の拡大に関しては、北京大学中国社会科学調査センター（2014）は『中国民生発展報告2014』を発表し、所得分配の不平等を測る指数とし、ジニ係数が0.73に達したと報告している。中国は深刻な超格差社会を形成していることがわかる。集団的衝突に関しては、2012年に中国社会科学院の発表した『2013年中国社会情勢分析と予測』（陸学芸等、2012）によると、現段階の中国では、集団間の社会的対立が多く、ここ数年来、様々な社会的矛盾（土地、家屋の強制収用、環境汚染、労使争議など）による集団的衝突は数万件となり、甚だしい場合には数十万件に達しているという。社会的信頼度の低下に関しては、中国社会科学院が2013年1月に発表した『中国社会心理研究報告（社会心理青書2012-2013）』（饒印莎・周江等、2013）によると、近年、公的な事件や事故が多発し、都市住民の政府機関や公安・司法機関に対する信頼度は低く、広告、不動産、食品・薬品の製造、観光・飲食などの業界への信頼度はきわめて低く、中国社会の全体的な信頼度は60点未満²⁾に下がっており、特に社会不信感が拡大し、固定化する傾向を露呈している。

以上のような社会的環境のなかで暮らす中国人は、はたして幸せであろうか。本研究の課題は、現段階の中国人の主観的幸福度の現状を明らかにしたうえで、主観的幸福度の規定要因を分析することにある。現実要因としては、属性と社会関係と社会意識の3つをとりあげる。ここでいう主観的幸福度（以下、幸福度と称する）とは、生活の質、あるいは豊かさ、充実・満足に関する人々の主観的評価のことで、属性としては、性、年齢、学歴、

月収、職業階層、婚姻状況の6つで、社会関係としては、パーソナルネットワークと団体参加の2つをとりあげる。社会意識は、中国の社会的環境を考慮にいて、社会的公平度、住民間の社会的支援、社会規範の遵守、社会的信頼度、社会的衝突の5つに対する主観的評価をとりあげる。

2 先行研究

2.1 住民の属性と幸福度

個人がどのような高さの幸福度を持っているかという問題は、その個人の属性と密接に関連する問題である。日常生活において、男性と女性、低収入者と高収入者など、属性によって幸福度が異なっているであろうことは、容易に想像のつくことである。今まで欧米および日本の先行研究は、こうした個人の諸属性と幸福度との関係を実証的に分析した。

中国の上海大学の袁浩ら（2013）は、「主観幸福感的国際経験研究総述」という論文に欧米学者の研究成果を総括したが、性、年齢、学歴、収入、婚姻状況と幸福度との関連は、以下のとおり指摘した。

- (1) 性別：男性と女性とでは、幸福度が顕著に異なっており、男性より女性のほうが幸福度が高い。
- (2) 年齢：年齢と幸福度には一貫した傾向が存在している。すなわち、幸福度は若いうちは高く、中年期に一度低下した後、高齢期に再び上昇するというU字型の関連が示される。
- (3) 学歴：学歴と幸福度の関係については、Blanchflower と Oswald、Shinn などの先行研究が、高学歴であるほど幸福であることを示している。しかし、Ross と Willigen の研究によると、学歴と幸福度とは直接的な関連を持たないということである。
- (4) 収入：収入と幸福度とは、複雑な関連を示している。Easterlin、Blanchflower と Oswald などの研究は、収入が増加すると、幸福度は高まるが、収入が一定水準を超えると、その相関関係は弱くなることを実証した。この調査結果は、収入が増大しても幸福度の上昇にはつながっていないことを示している。しかし一方、Veenhoven と Hagerty は、先進諸国および発展途上国のデータ分析により、収入の増加に伴い住民の幸福度がともに上昇していることを発見した。またDienerらの研究でも、収入の増加と幸福度とは正の相関にあることを明らかにした。これらの学者によれば、収入の増加は、生活の充実度が高められ、よりよく人々の生活欲求を満たすことによって、人々の幸福度を改善させる、ということである。
- (5) 婚姻状況：未婚者よりも既婚者の方が幸福度が高いということは、多くの実証的研究で明らかにされているが、Lucas などの研究によると、婚姻状況と幸福度との関連はそれほどみられないということである。

また、日本や中国では、職業階層と幸福度との関連を分析し、職業的地位と幸福度とは正の相関にあることを明らかにした。たとえば、佐野晋平・大竹文雄（2007）、森川正之

(2010) は、サービス業や金融業や公務員といった職種が労務職やパートタイマーと比べ幸福度が高いことを実証した。また、職種をコントロールした場合、管理職は幸福度が高いことを示した。曹大寧 (2009) は、無職者、肉体労働者、一般の事務要員、専門技術者、国有企業の経理要員と国家・社会の管理者などの幸福度を分析し、職業的地位が高いほど幸福度が高いことを明らかにした。

2.2 社会関係と幸福度

先行研究は、社会関係をパーソナルネットワークと団体参加にわけて、それぞれの幸福度におよぼす効果を分析してきた。丘海雄と李敢 (2012) は「国外多元視野“幸福”観研析」という論文に、パーソナルネットワークと幸福度との関連に関する欧米学者の研究成果を紹介し、パーソナルネットワークが幸福度上昇の要因の1つで、両者は正の相関にあることを指摘した。たとえば、Seligman の研究は、友人など親しい間柄との関係の親密さが幸福感にポジティブな影響を及ぼすことを示している。また、Helliwell と Putnam がパーソナルネットワークに対する満足度と幸福度との関連を分析し、回答者の「主観評価」による家族、友人、近隣との関係の満足度評価が幸福感と正の相関を持つことを示した。

また、劉明前と胡三嫚 (2012) が社会团体への参加頻度と幸福度との関連を分析し、積極的に社会团体に加入することは、精神的充実感にポジティブな影響を与えられ、幸福度上昇の重要な要因であることがわかった。

2.3 社会意識と幸福度

幸福度は、生活の質、あるいは豊かさ、充実・満足に関する主観的評価によるものとして、居住地域の社会的環境にも規定されることが、多くの先行研究に明らかにされた。たとえば、袁正ら (2013) は「収入水平、分配公平与幸福感」という論文に、Hagerty、Luttmer などの学者の、居住地域における階層間の収入不平等がひどいと思う住民には幸福度が低くみられるという研究成果を指摘したうえ、中国における収入の公平度と幸福度との関連を分析したが、収入の公平度が低い地域では、幸福度が低いことを明らかにした。また、裴志軍 (2010) は「家庭社会資本、相对收入与主観幸福感」という論文に、Diener などの学者の、居住地域における住民の他人への信頼度と幸福度は正の相関にあるという研究成果を指摘したうえ、中国における農民の社会的信頼と幸福度との関連を分析し、両者は正の関係にあることを明らかにした。さらに、張羽と邢占軍 (2007) は、「社会支持与主観幸福感関係研究総述」という論文に、欧米の学者の社会的支援と幸福度に関する研究成果を総括し、社会的支援は幸福度にプラスの効果を与えることがわかった。たとえば、Weiss、Kahn と Antonucci、Meehan などの研究は、コミュニティにおける住民が生活問題のある時、社会的支援が多いほど、幸福度が高いことを明らかにした。

コミュニティにおける住民の社会規範への遵守と幸福度との関連に関する先行研究はみられないが、住民が社会的規範を守れば、社会秩序の安定性を高められ、幸福度にプラ

スの効果を与えられることが想定できよう。また、社会的衝突と幸福度との関連に関する先行研究もみられないが、住民、集団、組織の間における社会的衝突は相互の関係を悪化させ、相互の信頼度を低下させ、幸福度に悪影響を与えられることが想定できよう。

以上のように、先行研究から、幸福度は住民の属性と社会関係のほか、居住地域の社会的環境に関する社会意識にも影響されることがわかった。

以下では、筆者が実施した中国浙江省における杭州市と中余郷の2つの地域調査のデータをもとに、本研究の課題を検討することにしよう。

3 データと変数

3.1 調査の概要

2013年8月に、中国浙江省における杭州市と中余郷³⁾の2地域に居住する18歳以上の住民を対象に、幸福度について質問紙調査を行った。浙江省は中国東部沿海地域に位置し、中国最大都市の上海市に隣接している。2012年末に常住総人口⁴⁾は5,477万人であったが、そのうち都市人口が3,461.5万人で、農村人口が2,015.5万人で、それぞれ総人口の63.2%と36.8%を占めている(浙江省統計局、2012)。また、市民1人当たりの年収は34,550元(約67.48万円に当たる)で、農民1人当たりの年収は14,552元(約28.42万円に当たる)であった(浙江省統計局、2012)。地域総生産における第1次産業、第2次産業、第3次産業の比率はそれぞれ4.8%、50.0%、45.2%であった(浙江省統計局、2012)。

調査地域の杭州市は、浙江省の省庁所在地で、浙江省の政治・経済・文化の中心地である。2012年時点の常住人口は880.2万人で、1人当たりの年収は37,511元(約73.26万円に当たる)であった(杭州市統計局、2012)。また、2012年時点の市内総生産における第1次産業、第2次産業、第3次産業の比率はそれぞれ3.3%、46.5%、50.2%であった(杭州市統計局、2012)。中余郷は、浙江省中部の山間地域にある農村地域である。2012年時点の人口は1.3万人で、1人当たりの年収は11,188元(約21.85万円に当たる)であった(浦江県統計局、2012)。また、2012年時点の郷内総生産における第1次産業、第2次産業、第3次産業の比率はそれぞれ63.5%、24.5%、12.0%であった(浦江県統計局、2012)。

すなわち、産業構造と都市人口の比率とによると、浙江省では、工業化、都市化が進んでいるが、調査地域である杭州市と中余郷の格差が大きく、杭州市は中余郷より工業化の水準がはるかに高く、住民の年収がはるかに高い。

調査対象者は、層化多段抽出法によって1,350人抽出した。調査は、各調査地の住民組織の委員に依頼し、留置き法によって実施した。1,350人のうち、1,146人から有効回答を得た。有効回収率は約84.9%である。1,146人のうち、杭州市は747人で、中余郷は399人である。

3.2 測定尺度

本研究では、調査データから、独立変数として住民の属性、社会関係、社会意識を、従

属変数として幸福度を用いることにする。

属性のうち、性は、男性は1、女性は0とするダミー変数として扱った。学歴は、5段階にわけて尋ね、低い方から順に1から5までの得点を与え、加算尺度を構成した。月収は、8段階にわけて尋ね、低い方から順に1から8までの得点を与え、加算尺度とした。職業階層は10種類にわけて尋ね、職業的地位の低い方から1から10までの得点を与え、加算尺度とした。婚姻状況は「未婚」「既婚」「離婚・死別」に分け、重回帰分析では、それぞれダミー変数として扱った。（詳細は表1を参照）

社会関係のうち、パーソナルネットワークは、「あなたが日ごろから何かと頼りにし、親しくしている家族員以外の人は何人くらいでしょうか」、団体参加は、「例えば、老人クラブ、同窓会、趣味サークルなど、今あなたが参加している団体はいくつでしょうか」という質問で、調査時点で回答者の取り結んだパーソナルネットワークと参加している団体の数をそのまま尋ねた。

社会意識は、前述のとおり、社会的公平度、住民間の社会的支援、社会規範の遵守、社会的信頼度、社会的衝突の5つの項目で、質問文と回答選択肢は、以下のとおりである。

- (1) 社会的公平度：就職、昇進、収入分配、社会保障などの面で、総じていえば、今の社会は公平だと思いますか。非常に公平である、やや公平である、どちらともいえない、やや不公平である、とても不公平である。
- (2) 住民間の社会的支援：あなたが住んでおられる地域では、どなたか困りごとのあるときに、住民たちの助け合いが多いほうだと思いますか。非常に多い、やや多い、どちらともいえない、やや少ない、とても少ない。
- (3) 社会規範の遵守：あなたが住んでおられる地域では、駐車、ごみ捨て、信号により道を渡るときなど、住民たちはルールを守る意識が強いほうだと思いますか。非常に強い、やや強い、どちらともいえない、やや弱い、とても弱い。
- (4) 社会的信頼度：今の社会では、総じて言えば、人と人との間に社会的信頼が弱い。これについてどの程度ご賛同でしょうか。非常に賛成である、まあ賛成である、どちらともいえない、あまり賛成しない、全く賛成しない。
- (5) 社会的衝突：あなたが住んでおられる地域では、住民間の紛争、住民と企業との紛争などが多いほうだと思いますか。非常に多い、やや多い、どちらともいえない、やや少ない、とても少ない。

各質問文の5つの選択肢に対して、上述の順に5、4、3、2、1の得点を与え、加算尺度を構成した。したがって、得点が大きいほど、社会的公平度が高く、住民間の助け合いが多く、社会規範の遵守意識が強く、社会的信頼度が低く、社会的衝突が多い、ということになる。

従属変数である幸福度は、自己の幸福の程度を主観的に評価したもので、その測度は一般的には、「全体としてみて、あなたは幸せですか」という質問に対して、「非常に不幸」な場合を1、「非常に幸せ」な場合を10とした場合の離散変数の回答として得られるが、

本研究では、中国の実情を考慮に入れて、「全体として、あなたは普段どの程度幸せだと感じていますか」という質問で測定した。回答選択肢は「とても幸せである」、「やや幸せである」、「どちらともいえない」、「やや不幸である」、「とても不幸である」の5段階で、この順に5から1の得点を与え、加算尺度を構成した。

分析は、まず、記述統計方法で住民の属性、社会関係、社会意識および幸福度の状況を示したうえで、住民の属性、社会関係と社会意識を独立変数とし、幸福度を従属変数とする重回帰分析を行った。

4 分析結果

4.1 属性、社会関係と社会意識

表1に示したのは、全体および杭州市と中余郷にみる属性の各変数の比率である。

表1 全体および杭州市、中余郷にみる属性 (%)

		全 体	杭 州 市	中 余 郷
性別	男性	47.0	45.1	50.6
	女性	53.0	54.9	49.4
年齢	18-30 歳	26.1	17.8	41.6
	31-40 歳	21.4	15.1	33.1
	41-50 歳	20.4	21.3	18.8
	51-60 歳	17.2	23.4	5.5
	61 歳以上	14.9	22.4	1.0
学歴	小学校卒およびそれ以下	5.2	5.0	5.8
	中学校卒	17.1	11.0	38.6
	高校卒	33.2	29.6	39.8
	短大・大卒	32.0	36.1	24.3
	大学院卒	12.5	18.3	1.5
月収	無収入	2.2	1.5	3.5
	2000 元以下	15.3	13.7	18.3
	2001-3000 元	29.5	20.3	46.6
	3001-4000 元	9.9	7.9	13.5
	4001-5000 元	5.6	6.3	4.3
	5001-6000 元	9.1	11.9	3.8
	6001-7000 元	12.7	16.3	6.0
	7001 元以上	15.8	22.1	4.0
職業階層	無職・失業・半失業	6.5	7.5	4.8
	農業勤労者	15.1	1.6	40.4

	産業労働者	22.9	29.2	11.0
	商業・サービス業の従業員	16.4	16.5	16.3
	個人経営商工業者	5.1	3.2	8.8
	事務要員	11.8	13.1	9.3
	専門技術者	5.9	6.6	4.8
	私営企業のオーナー	3.6	4.8	1.3
	経理要員	6.6	8.8	2.5
	国家・社会の管理者	6.0	8.7	1.0
婚姻	未婚	20.3	15.8	28.9
	既婚	76.3	80.1	69.0
	離婚・死別	3.4	4.1	2.1

表 2 に示したのは、全体および杭州市、中余郷の社会関係と社会意識に関する各変数の平均値である。

全体にみる社会関係では、パーソナルネットワークと団体参加の平均値はそれぞれ 18.05 人と 1.35 個である。また社会意識の各項目に対する主観的評価の平均値からみると、社会的公平度と社会的信頼度が低く、住民間の社会的支援が少なく、社会規範の遵守意識が弱く、社会的衝突が多いということがいえよう。

しかし、杭州市と中余郷の 2 地域を比較してみると、杭州市と中余郷は、パーソナルネットワーク、団体参加、社会的公平度に関する社会意識は、ほぼ同様であるが、住民間の社会的支援、社会規範の遵守意識、社会的信頼度の低下および社会的衝突に関する社会意識は有意に異なっている。杭州市は中余郷より、住民間の社会的支援が少ない、社会規範の遵守意識が弱い、社会的衝突が多いと思うのに対し、杭州市に比べ、中余郷のほうが、社会的信頼度は低い。

表 2 社会関係と社会意識 平均値 (標準誤差)

		全 体	杭 州 市	中 余 郷	F
社会 関係	パーソナルネットワーク	18.05 (1.85)	17.66 (1.01)	18.51 (2.81)	0.295
	団体参加	1.35 (0.74)	1.41 (0.77)	1.23 (0.73)	2.241
社会 意識	社会的公平度	2.81 (0.21)	2.76 (0.98)	2.84 (0.37)	0.286
	住民間の社会的支援	3.44 (0.23)	3.19 (0.26)	3.55 (0.25)	19.572***
	社会規範の遵守意識	2.44 (0.96)	2.23 (0.95)	2.71 (0.96)	49.231***
	社会的信頼度の低下	3.65 (0.28)	3.59 (0.32)	3.81 (0.22)	8.971**
	社会的衝突	4.33 (0.83)	4.46 (0.74)	4.18 (0.52)	43.518***

F は、分散分析における F 検定の数値である。有意確率は、** P<0.01、*** P<0.001 である。

4.2 幸福度の状況

表 3 は、全体および杭州市と中余郷の幸福度の状況である。

まず、全体にみた幸福度の状況に関して、「とても幸せである」、「やや幸せである」、「どちらともいえない」、「やや不幸である」、「とても不幸である」に関する回答の比率分布は、それぞれ 23.4%、16.1%、32.9%、16.7%、9.6%である。また、「とても幸せである」、「やや幸せである」、「どちらともいえない」、「やや不幸である」、「とても不幸である」に関する回答の平均値は 3.28 であることから、全体的幸福度は、「やや幸せである」のほうに接近しているといえよう。

つぎに、杭州市と中余郷の幸福度の状況についてみていこう。「とても幸せである」の回答比率は、杭州市が 26.9%で、中余郷が 19.5%で、前者は後者より 7.4 ポイント高いが、「やや幸せである」の回答比率は、杭州市が 13.5%で、中余郷が 21.1%で、前者は後者より 7.6 ポイント低い。したがって、杭州市と中余郷の「とても幸せである」と「やや幸せである」の回答比率の合計は、それぞれ 40.4%と 40.6%で、ほぼ同様である。「どちらともいえない」の回答比率は、杭州市が 30.8%で、中余郷が 36.8%で、前者は後者より 6.0 ポイント低い。また、「やや不幸である」と「とても不幸である」の比率は、杭州市はそれぞれ 17.4%と 11.4%で、合計 28.8%となるが、中余郷はそれぞれ 15.3%と 7.3%で、合計 22.6 となり、杭州市の比率は中余郷の比率より 6.2 ポイント高い。さらに、上述の分析結果は、統計的に有意であった(χ^2 値 = 22.936、 $P < 0.001$)。

幸福度の 5 段階に関する回答の平均値は、杭州市が 3.27 で、中余郷が 3.30 で、前者は後者より 0.03 低い、分散分析における F 値はわずか 0.159 で、統計的に有意でなかった。平均値の有意差はないが、幸福度は中余郷がやや高い。

表 3 全体および杭州市と中余郷にみる幸福度の状況 (%)

	全 体	杭 州 市	中 余 郷	
とても幸せである	24.3	26.9	19.5	$\chi^2 = 22.936^{***}$
やや幸せである	16.1	13.5	21.1	
どちらともいえない	32.9	30.8	36.8	
やや不幸である	16.7	17.4	15.3	
とても不幸である	9.6	11.4	7.3	
平均値 (標準誤差)	3.28 (1.27)	3.27 (1.33)	3.30 (1.16)	F=0.159

χ^2 は、 χ^2 検定 (chi-square test) における Pearson のカイ 2 乗値で、F は、分散分析における F 検定の数値である。

有意確率は、*** $P < 0.001$ である。

4.3 属性、社会関係、社会意識と幸福度との関連

表 4 は、全体および杭州市と中余郷にみた、属性、社会関係と社会意識を独立変数とし、幸福度を従属変数とした重回帰分析の結果を示したものである。

4.3.1 全体にみる重回帰分析の結果

全体の幸福度に関して、モデル 1 では、属性のうち、年齢、婚姻状況との有意な関連はないのに対し、性、学歴、月収、職業的地位とは有意な関連があった。男性は女性より標準化回帰係数 (Beta) が 0.051 ($P<0.10$) 低く、また学歴、月収、職業的地位と幸福度との標準化回帰係数は、それぞれ -0.102 ($P<0.01$)、 0.258 ($P<0.001$)、 0.235 ($P<0.001$) である。すなわち、男性は女性より幸福度がやや低く、学歴が高いほど、幸福度が低くなったが、月収と職業的地位が高いほど、幸福度が高くなった。社会関係のうち、パーソナルネットワークと団体参加とは、いずれも有意な相関があった。パーソナルネットワークと、団体参加と幸福度との標準化回帰係数はそれぞれ 0.180 ($P<0.001$) と 0.058 ($P<0.10$) である。すなわち、パーソナルネットワークと団体参加が多いほど、幸福度が高くなった。社会意識のうち、社会的公平度、住民間の社会的支援、社会規範の遵守、社会的衝突に対する主観的評価とは、いずれも有意な関連があったが、社会的信頼度とは有意な関連がなかった。社会的公平度、住民間の社会的支援、社会規範の遵守意識、社会的衝突に対する主観的評価と幸福度との標準化回帰係数は、それぞれ 0.202 ($P<0.001$)、 0.093 ($P<0.01$)、 0.135 ($P<0.01$)、 -0.072 ($P<0.05$) である。すなわち、社会的公平度が高く、住民間の社会的支援が多く、社会規範の遵守意識が強いと思うものの幸福度は高かったが、社会的衝突が多いと思うものの幸福度が低かった。モデル 1 の自由度調整済みの決定係数 (Adj.R²) は 0.350 で、分析結果の精度が高いことを示している。

4.3.2 杭州市と中余郷にみる重回帰分析の結果

モデル 2 とモデル 3 は、それぞれ杭州市と中余郷にみた属性、社会関係、社会意識の各変数の幸福度に対する効果を示している。それによると、属性、社会関係、社会意識の各変数の幸福度に対する効果は、杭州市と中余郷において、共通点も相違点もあった。

まず、共通点に関して、モデル 2 とモデル 3 の分析結果から、年齢、学歴、婚姻状況、社会的信頼度の幸福度に対する効果は有意でないこと、月収と職業的地位の幸福度に対する効果が有意な正の相関を示すこと、社会関係の幸福度に対する効果が有意な正の相関を示すこと、社会的公平度が高いと思うものの幸福度が有意に高いこと、の 4 つの点が指摘できる。

つぎに、相違点に関して、モデル 2 とモデル 3 の分析結果から、以下の 5 つが指摘できる。

- (1) 杭州市には、性と幸福度とは有意な関連がなかったが、中余郷には、性と幸福度とは有意な関連があり、女性より男性の方が幸福度が低い。

- (2) 杭州市では、月収と幸福度との標準化回帰係数は 0.359 (P<0.001) で、月収が高いほど、幸福度が高くなったが、中余郷では、月収と幸福度とは有意な関連を示していなかった。
- (3) 杭州市では、団体参加と幸福度との標準化回帰係数は 0.142 (P<0.01) で、団体参加が多いほど、幸福度が高くなるのに対し、中余郷では、団体参加と幸福度との標準化回帰係数は-0.106 (P<0.05) で、団体参加が多いほど、幸福度が低くなっている。
- (4) 杭州市では、住民間の社会的支援が多く、社会規範の遵守意識が強いと思うものの幸福度が高いのに対し、中余郷では、住民間の社会的支援、社会規範の遵守意識に対する主観的評価と幸福度とは、有意な関連がなかった。
- (5) 杭州市では、社会的衝突が多いと思うものの幸福度が高いのに対し、中余郷では、社会的衝突が多いと思うものの幸福度がかえって低かった。
- さらに、モデル 2、モデル 3 の自由度調整済みの決定係数 (Adj.R²) はそれぞれ 0.488、0.231 で、分析結果の精度がいずれも高いことを示している。

表4 幸福度を従属変数とする重回帰分析

従属変数：主観的幸福度		モデル1 全 体	モデル2 杭 州 市	モデル3 中 余 郷	
属性	性 ^a 男性	-0.051 ⁺	-0.025	-0.103*	
	年齢	-0.054	-0.009	-0.003	
	学歴	-0.102**	-0.022	-0.073	
	月収	0.258***	0.359***	0.123	
	職業的地位	0.235***	0.211**	0.211**	
	婚姻状況 ^b	既婚	0.016	0.026	0.044
		離婚	0.029	0.004	0.086
社会 関係	パーソナルネットワーク	0.180***	0.150***	0.163**	
	団体参加	0.058 ⁺	0.142**	-0.106*	
社会 意識	社会的公平度	0.202***	0.191***	0.275***	
	住民間の社会的支援	0.093**	0.097*	0.013	
	社会規範の遵守意識	0.135**	0.179***	0.029	
	社会的信頼度	0.054	0.045	0.093	
	社会的衝突	-0.072*	0.083*	-0.284***	
Adj.R ²		0.350	0.488	0.231	

数値は標準化回帰係数 (Beta) で、a、b の参考基準はそれぞれ女性、未婚である。
有意確率は、⁺P<0.10、* P<0.05、** P<0.01、*** P<0.001 である。

5 考察と結論

本研究の目的は、経済成長が著しい中国における幸福度の現状、とりわけ、幸福度の規定要因を明らかにすることにあつた。そのため、本研究では、都市化が進んでいる浙江省をとりあげ、都市と農村を代表する杭州市と中余郷を対象に実施した調査データをもとに、分析を行なつた。分析結果を要約すると、次のようになる。

5.1 中国における幸福度の全体的特徴

中国において、幸せと思う住民は決して少なくないが、全体的にみれば、幸福度はそれほど高くはない。

他の条件が等しい場合、属性、社会関係、社会意識の幸福度に対する独立効果は以下のとおりである。

- (1) 属性のうち、年齢、婚姻状況と住民の幸福度との間に有意な差はみられなかったが、
①男性より女性のほうが幸福度がやや高いこと、②学歴が高いほど幸福度が低いこと、
③収入が多いほど幸福度が高いこと、④職業的地位が高いほど幸福度が高いこと、の4つの傾向が指摘できる。
- (2) 社会関係のうち、パーソナルネットワークも団体参加も多い住民は、幸福度が高い。
- (3) 社会意識のうち、社会的信頼度が高いと思う住民とそう思わない住民とは、幸福度に有意な差がみられなかったが、社会的公平度が高く、住民間の社会的支援が多く、社会規範の遵守意識が強いと思う住民は、幸福度が高い。また、社会的衝突が多いと思う住民は、幸福度が低い。

すなわち、幸福度は、属性のうちの性、学歴、収入、職業的地位と有意な関連がみられる。また、幸福度は、社会関係全体に規定され、社会意識によっても規定されている。属性、社会関係、社会意識の幸福度に対する効果は、属性より社会関係と社会意識のほうが、幸福度に対する効果が大きいことを示すといえよう。

5.2 都市と農村における幸福度の違い

中国における住民全体にみた幸福度の水準は、都市においても農村においてもほぼ同様であり、また、幸せと思う住民は量的にほぼ同じであるが、不幸と思う住民は、農村より都市のほうで明らかに多い。

他の条件が等しい場合、属性、社会関係、社会意識の幸福度に対する効果としては、都市と農村で共通しているところは、①年齢の幸福度に対する効果は、有意でないこと、②学歴の幸福度に対する効果は、有意でないこと、③婚姻状況の幸福度に対する効果は、有意でないこと、④職業的地位と幸福度とは、正の相関を示すこと、⑤パーソナルネットワークと幸福度とは、正の相関を示すこと、⑥社会的公平度が高いと思う住民は、幸福度が高いこと、⑦社会的信頼度が高いと思う住民とそう思わない住民とは、幸福度に有意な差がみられないこと、の7つが指摘できる。

都市と農村とで有意に異なっている点としては、以下の6つが指摘できる。

- (1) 都市では、男性と女性の幸福度に大きな差がないが、農村では、男性より女性のほうが、幸福度が高い。
- (2) 都市では、収入と幸福度とは正の相関を示しているが、農村では、収入と幸福度とは有意な相関を示していない。
- (3) 都市では、団体参加と幸福度とは正の相関を示しているが、農村では、団体参加と幸福度とは逆相関を示している。
- (4) 都市では、住民間の社会的支援が多いと思う住民は、幸福度が高いが、農村では、住民間の社会的支援と幸福度に有意な差がない。
- (5) 都市では、社会規範の遵守意識が強いと思う住民は、幸福度が高いが、農村では、規範の遵守意識と幸福度に有意な差がない。
- (6) 都市では、社会的衝突が多いと思う住民は、幸福度がかえって高いが、農村では、社会的衝突が多いと思う住民は、幸福度が低い。

以上の結果は、①都市では、属性、社会関係と社会意識のうち、社会関係と社会意識の幸福度に対する効果が大きいこと、②農村では、属性、社会関係、社会意識のうち、社会関係の幸福度に対する効果が大きいことを示しており、都市と農村の幸福度の規定要因が大きく異なっている。

では、なぜ都市と農村においては、住民の幸福度の規定要因が大きく相違したかについては、以下の2つの要因が指摘できる。

- (1) 表1に示したように、農村より都市のほうで、貧富の格差と職業階層の職業的地位の差が顕著である。
- (2) 表2に示したように、農村より都市のほうで、住民間の社会的支援が少なく、社会規範の遵守意識が弱く、社会的信頼度が弱く、社会的衝突が多い。

すなわち、1978年以降、中国では、経済が急速に成長しており、経済発展による職業の階層分化およびそれによる収入の階層分化は、都市を中心にみられる。それによって、収入の増加による生活の充実度の向上および生活欲求の充足による幸福度の向上は、主として都市に現れたのである。また、経済発展による住民間の社会的支援の減少、社会規範の遵守意識の弱化、社会的信頼度の低下、社会的衝突の増加は、主として都市に現れている。その2つの要因が、幸福度に対して効果が大きいといえよう。

しかし、なぜ農村においては、団体参加は幸福度にマイナスの効果を与えたのか、なぜ都市においては、社会的衝突は、かえって幸福度にプラスの効果を与えたのか。この2つの問題は、農村と都市における社会関係としてのパーソナルネットワークの質と、社会的環境としての社会的公平度、住民間の社会的支援、社会規範の遵守意識、社会的信頼度にかかわる問題で、その発生メカニズムは今後、特に検討しなければならない課題である。

今後、中国経済はさらに発展していくことが予測できるが、中国において幸福度を高めることは、格差の是正などの政府の課題とともに、信頼できる社会関係の形成や集団への

参加という個人の努力によって、調和のとれた社会的環境を構築することが必要不可欠であろう。

[注]

- 1) 中国の通貨単位は元である。本稿で示した日本円は、すべて中国人民銀行の2013年12月23日の為替レート（100円=5.12元）で換算したものである。
- 2) 社会的信頼度は「非常に信頼できる、まあ信頼できる、どちらともいえない、あまり信頼しない、全く信頼しない」という5段階で測定し、またこの順に100、75、50、25、0の得点を与えた。
- 3) 中国の地方行政システムは、省、市、県、郷鎮に序列化されている。省は行政的に日本の都道府県に相当し、省の管轄地域内に市、県、郷があって、それぞれ日本の市、町、村に相当する。したがって、郷は県がその管轄下に置く農村部の末端行政区画単位である。
- 4) 常住人口とは、調査時に調査地域内の住居に6か月およびそれ以上にわたって住んでいるか、または住むことになっている住人（常住者）の人口である。

[参考文献]

- 袁浩・劉緒海・廖文凱，2013，「主観幸福感的國際經驗研究總述」上海大学“都市社会轉型与幸福感變遷”の課題組，『都市社会轉型与幸福感變遷』（1978 - 2010）北京：社会科学文献出版社。
- 袁正・鄭敏・韓馳，2013，「收入水平，分配公平与幸福感」『当代財經』11。
- 裴志軍，2010，「家庭社会資本，相对收入与主観幸福感」『農業問題研究』7。
- 浦江県統計局，2012，『浦江県国民經濟与社会發展統計公報』浦江県統計信息网
(<http://www.pjtj.gov.cn>)。
- 饒印莎・周江等，2013，「都市住民社会信任狀況調查報告」王俊秀・楊宜音編，『中国社会心態研究報告（2012—2013）』北京：社会科学文献出版社。
- 邢占軍，2011，「我国居民收入与幸福感關係の研究」『社会学研究』1。
- 国家統計局，2013，『中国統計年鑑』北京：中国統計出版社。
- 杭州市統計局，2012，『杭州市国民經濟与社会發展統計公報』杭州統計調查信息网
(<http://www.hzstats.gov.cn>)。
- 丘海雄・李敢，2012，「国外多元視野“幸福”觀研析」『社会学研究』2。
- 森川正之，2010，「雇用保障とワーク・ライフ・バランス——補償賃金格差の視点から」『經濟産業研究所 Discussion Paper Series』10-J-042。
- 北京大学中国社会科学調查センター，2014，「中国民生發展報告 2014」『光明日報』8月5日。
- 陸学芸，2004，『当代中国社会流動』北京：社会科学文献出版社。
- 陸学芸等，2012，『2013年中国社会情勢分析与予測』北京：社会科学文献出版社。
- 劉明前・胡三嫻，2012，「大学生社团参与狀況对其主観幸福感的影響」『重慶文理学院学报』（社会科学版）4。
- 佐野晋平・大竹文雄，2007，「労働と幸福度特集・仕事の中の幸福」『日本労働研究雑誌』558。
- 浙江省統計局，2012，『浙江省国民經濟与社会發展統計公報』浙江省統計信息网
(<http://www.zj.stats.gov.cn>)。

曹大寧, 2009, 「階層分化, 社会地位与主觀幸福度的実証考慮」『統計与決策』10.
張羽・邢占軍, 2007, 「社会支持与主觀幸福感關係研究総述」『心理科学』6.

所属：中国 浙江工商大学公共管理学院

E-mail アドレス：zhangyunwu2@hotmail.com